

[海外学会参加報告]

世界作業療法士連盟 (WFOT) 国際学会と我が国の作業療法

岩崎テル子

WFOT第13回作業療法国際学会が2002年6月22日から28日までの7日間、スウェーデンの首都ストックホルムでAction for health in a new millenniumのテーマの下に開催された。日本からの参加者は162人で、参加71ヶ国の中でも上位を占めたため、メイン会場では同時通訳がついた。演題数1,400余の中で日本人の演題は100題を越えたが、筆者も含めて殆どがポスター展示であった。英語での表現力の向上は我々日本人の必須課題であることを改めて痛感した。

作業療法は20世紀初頭に欧米、カナダ、オーストリア等各地で、医療の一端として開始された。世界作業療法士連盟World Federation of Occupational Therapists (WFOT) がストックホルムで結成されたのは1952年である。現在加盟国は55ヶ国にのぼり、加盟準備国も数ヶ国ある。今回は結成地での50周年記念大会となった。ノーベル賞受賞式会場である市庁舎で盛大な祝賀晩餐会が行われ、雨の中正装の男女が多勢集った。以下WFOTの主要任務と国際学会から見てきた日本の作業療法士にとっての今日的課題について簡単に述べる。

1 WFOT作業療法士教育最低基準に関する勧告

最低基準はMinimum Standards for Education of Occupational Therapistsと呼ばれ (<http://www.wfot.org.au/>で公開)、作業療法の質の確保のため設けられた。基礎科目 (解剖・生理・心理学等) 500時間、OT

専門科目1,500時間、臨床実習1,000時間の合計3,000時間以上が必要とされ、必要な知識・技術・態度やカリキュラム内容などが提示されている。これを充足するには90週もしくは3年以上の教育期間を要するが、この基準を充足している養成校の卒業生には、WFOT加盟国であれば原則どこでも働けるという得点がある。このため日本作業療法士協会教育部では養成校の定期的審査を行い、WFOTに認定 (再) 申請を常時行っている。この最低基準は2002年改定され、邦訳が今年度完成した。

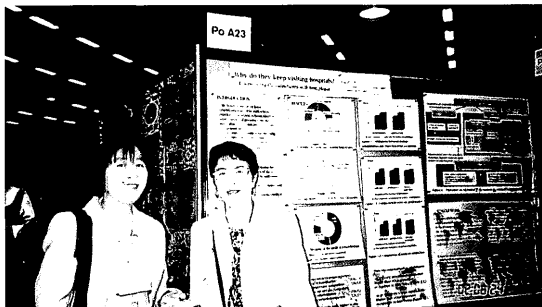
2 理論の90年代から再び実践指向へ

—根拠に基づく実践 (EBOT) への強いニーズ

実践科学としての作業療法では、常に実践優位で独自理論が乏しいと言われていたが、実際には包括理論から実践理論まで主要なものだけで11個ある。特に米国で80年代から発表され始めた「人間作業モデル」や「作業科学」、カナダの「作業遂行モデル」等が90年代には実践を通じて検証されはじめ、賛否両論で世界的広がりをみせている。その中でも各国共厳しい医療経済を反映して、根拠に基づくOT実践 (EBOT) のために、強力な根拠になる (効果判定基準を備えた) 実践理論へのニーズが高いようだ。実践practice分野359演題 (全演題の25%) に対し、理論theory関係は78演題 (6%) であったが、我がOT学会に比べれば遙かに高率である。

3. OT教育への高い関心

“education”で検索すると251演題（18%）という高率になった。特に23日は1日“Education day”としてさまざまな実践が報告され、筆者も後半参加した。互いに教育最低基準に則っていても技術職の養成指向と、高度専門職業人（研究・教育を含めて）の養成指向という2つの流れを感じ、国情の違いを考えさせられた。



右側筆者